

## 1 はじめに

本大会への取り組みが始まったころはコロナの真っ只中であった。全く先が見えない中、私たちは取組の方向性を話し合い、「日々の当たり前の国語の授業を、どのように充実させるのか」というコンセプトにたどりついた。先進的な研究ではないかもしれないが、この「問い」を解決していくことで、山鹿、玉名、荒尾の国語教師の授業力がさらに高まり、生徒に還元されていくことを目標とした。そして、生徒の実態を調査し、目指す生徒の姿を「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める子供」とした。その実現のために、「熊本の学び」に示される、授業づくりの視点に基づいた授業の改善に取り組んだ。

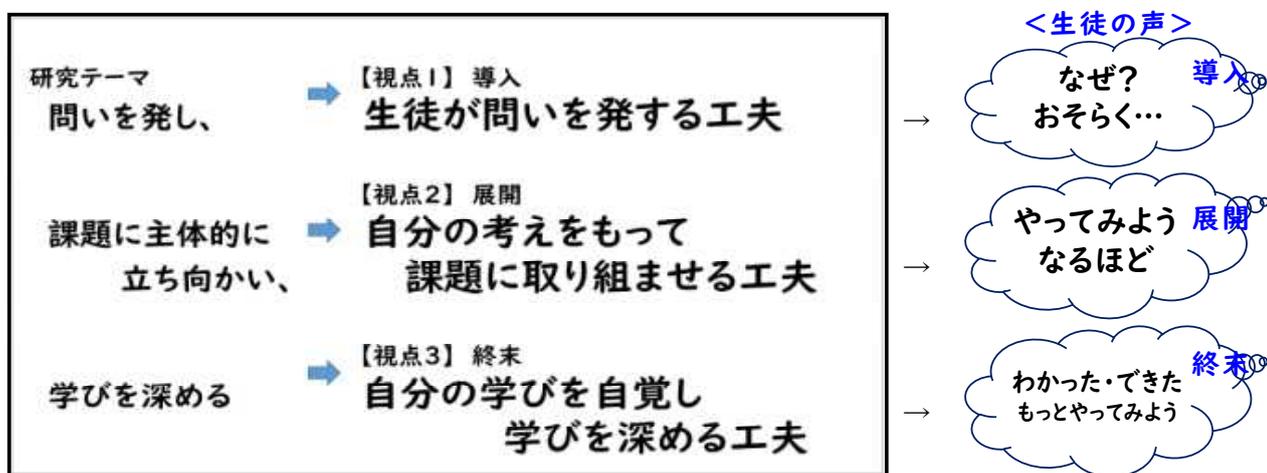
## 2 研究テーマ

「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める子供を育成する授業づくり」

## 3 研究の視点

### (1) 視点と生徒の声

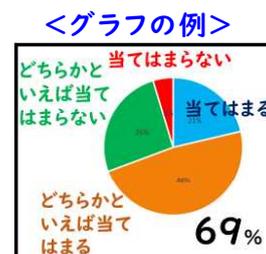
本大会では、大会テーマを3つの視点に分けて取り組んだ。また「熊本の学び」では、導入・展開・終末にそれぞれ子供の声が示されている。本大会では、その子供の声に着目した。導入では「なぜ・おそらく」という疑問や予想の声、展開では「やってみよう・なるほど」という挑戦や納得の声、終末では「わかった・できた・もっとやってみよう」という達成感や実感、更なる意欲の声を授業改善の手がかりとした。



## 4 生徒の実態

※実態調査について

- ・対象 : 授業を受ける4クラス生徒150名
- ・選択肢 : 当てはまる・どちらかといえば当てはまる・どちらかといえば当てはまらない・当てはまらない (グラフの色は右例を参照)
- ・数字 : 肯定の合計 (右例の69%は当てはまる・どちらかといえば当てはまるの合計)



## (1) 国語への意識と「熊本の学び」の授業づくり

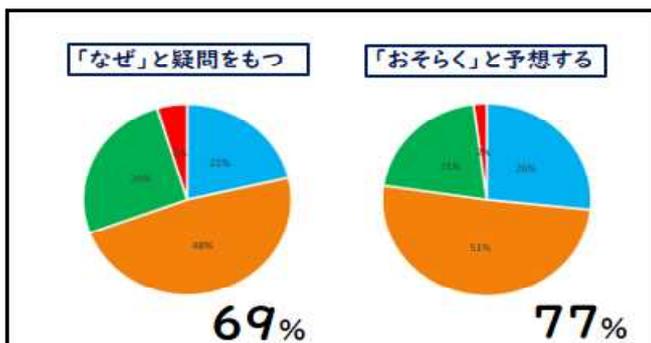
### 国語についての意識調査

- 国語は大切だと思う 96%
- 国語の授業はよく分かると思う 88%
- 国語は好きだと思う 72%

※数値は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計

国語を大切に思い、授業がよく分かるという生徒より、国語が好きだと思う生徒がやや少ない。「大切だ・分かる・好きだ」に「当てはまらない」の割合も1%・2%・6%と増す。そこで、もっと国語が好きだと思うようになる授業づくりをしたい考えた。

## (2) 視点1導入 生徒が問いを発する工夫

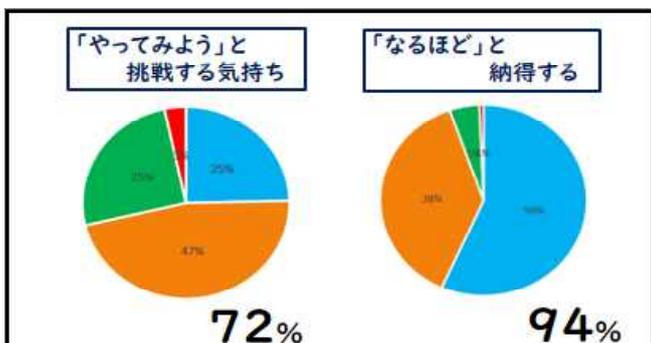


視点1については、生徒の声「なぜ」・「おそらく」を使って実態調査した。

- 「おそらく」と予想する 77%
- 「なぜ」と疑問をもつ 69%

視点1導入では、「おそらく」予想をしているが、「なぜ」と疑問をもつことが少ないことがわかった。

## (3) 視点2展開 自分の考えをもって課題に取り組ませる工夫



視点2については、生徒の声「やってみよう・なるほど」を使って実態調査した。

- 「やってみよう」と挑戦する 72%
- 「なるほど」と納得する 94%

視点2展開では、「やってみよう」と挑戦する割合は少ないと、わかった。この結果から、話し合いの場面で「受け身」になっている生徒がいるのではと考えられた。そこで、「受け身の姿勢」に関連する調査結果に注目した。

- 話し合いで相手に質問をする 63%

この結果も「受け身の姿勢」を示していると考えた。

また、「話し合い」についての調査結果も1つ取り上げる。

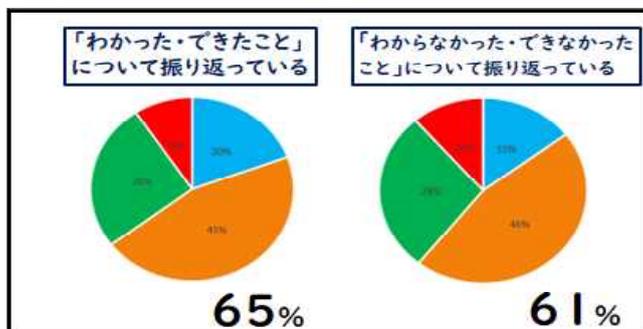
- 話し合いで考えが深まる 89%
- 話し合いで考えが広がる 82%

「話し合いで、考えが広がると感じる」がやや少ないと、分かった。この点について山鹿・玉名・荒尾の3つの部会の結果を比較すると、「話し合いで自分の考えが広がる」が10%高い部会があった。その部会は「課題解決のために自分で考えて、取り組んでいる」が

6%高いことが特徴だった。このことから「自分の考え」をもつことが「話し合いの質を高めるのではないかと考えた。また、自分の考えをもつことは「受け身の姿勢」改善にもつながるはずである。

この実態から「やってみよう」を引き出すために「自分の考え」をもたせることを意識して視点2に取り組んだ。

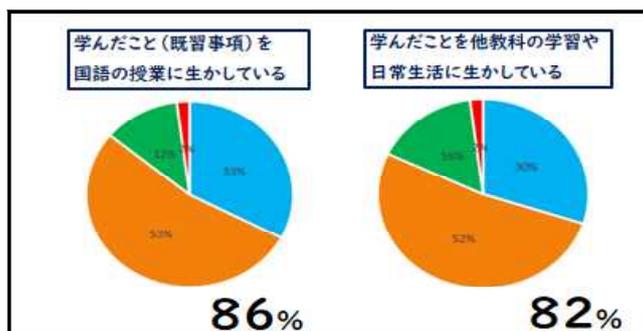
#### (4) 視点3 終末 自分の学びを自覚し学びを深めさせる工夫



視点3については、生徒の声「わかった・できた」「もっとやってみよう」を使って実態調査した。

- 「わかった・できた」を振り返る 65%
- 「わからなかった・できなかったこと」を振り返る 61%

視点3導入では、「わかった・できた」「わからなかった・できなかった」どちらも割合が低いと分かった。「わからなかった・できなかった」を振り返らせるのは、それらを振り返っておくと、単元の学習が進むうちに、「わからなかった・できなかった」が、「わかるようになった・できるようになった」に変わっていくため、達成感や充実感につながると考えた。



また「もっとやってみよう」については、次の2つから把握することにした。

- 学んだことを国語の授業に生かしている 86%
- 国語で学んだことを他の教科や日常生活に生かしている 82%

「もっとやってみよう」については、「学んだことを国語の授業に生かす」のがやや低いことがわかった。この実態から「わかった・できた」という振り返りを引き出すために振り返りの視点を与えたり教師からの声かけをしたりして視点3に取り組んだ。

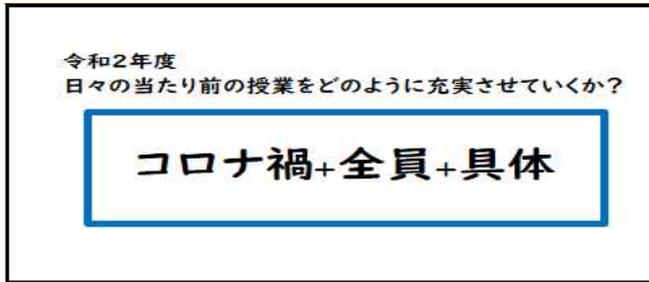
※実態調査から3点に着目して授業改善を進めたいと考えた。

- ・「なぜ」をひきだすこと
- ・自分の考えをもたせることが「やってみよう」につながる
- ・「分かった・できた」に対し教師の言葉で「もっとやってみよう(更なる意欲)」につなげる

## 5 取組の実際について

### (1) 令和2年度の取組

新型コロナウイルスの感染拡大を防止のための休校措置という先の見えない事態に直面し大会の開催がどうなるかわからない不安から始まった。具体的なことを決めることができなかった。



先が見通せない中ではあったが、「日々の当たり前授業を充実させていく」ために「コロナ禍でもできることを」「山鹿・玉名・荒尾の国語教師全員が関わって」「具体的な授業づくりを行う」という考え方で、県大会への取り組みを始めた。開催・中止の判断はできないため、コロナ禍の今できることは開催

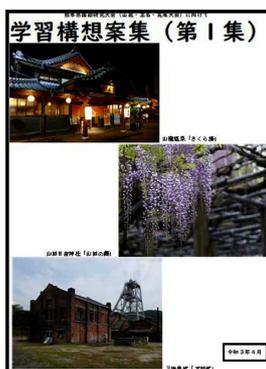
もしくは紙上発表の準備だけであったが、三密を避けるため集まって授業づくりをすることが当時はできなかった。その中で全員が関わるために「授業づくりヒント集」と「学習構想案集」づくりに取り組んだ。もし、紙上発表になったとしても、それらを土台に研究を進めることができると考えた。

#### ①授業づくりヒント集

★読むこと2 (文学的教材・詩歌)	
百科事典少女	「犬」はなぜ登場するのか。作者のねらいを考えさせる なぜ「Rちゃん」とイニシャルの名前にしたのか・●ちゃんの場合とどう違うか考えさせる 「し」の項目を登場させた筆者のねらいを考えさせる 「ンゴマ」の説明は必要だったか、ない場合と比べてどちらがいいか
③初恋	「林檎」の場合とそれ以外の場合ではどんな人がどんな恋をしているか考えてみる。

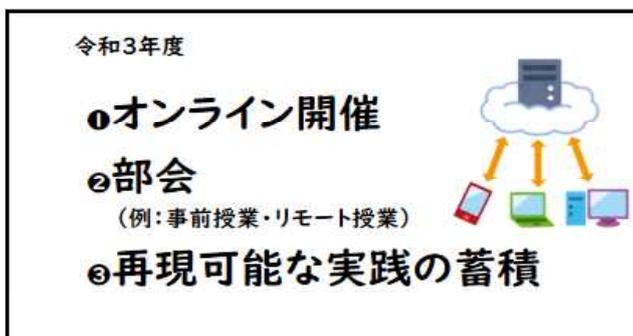
山鹿・玉名・荒尾の国語教師全に生徒が意欲的に(わくわく・ノリノリで)取り組んだ実践をアンケートした。発問や課題や班活動の仕方など具体的な取組が集まった。それを左のように一覧にまとめた。

#### ②学習構想案集



本大会は、学習構想案の形式で提案するため、まず全員が学習構想案を作成することにした。全員参加で、31の学習構想案が集まり、冊子にした。「単元終了時の生徒の姿や本単元で働かせる見方・考え方、単元を通した学習課題」などをどのように設定したかなど授業づくりの参考にできた。また、実際に学習構想案を作成することでその良さに気づいたり、疑問を部会や研修で話し合ったことで、学習構想案についての理解が深まった。

### (2) 令和3年度の取組



#### ①オンライン開催の決定

当初は県大会に関わる出張や研修は全て中止となり、途方にくれた。しかし、端末の配付とワクチン接種によりオンライン開催を決定するに至った。同時にオンラインでの研修やクラウド上での情報共有・資料交換などコロナ禍でも取り組める形が整っていった。

## ②部会

部会ではコロナ禍における工夫というより、苦勞がたくさんあった。例えば、三密を避けるために「部会長と授業者」だけで授業をつくりすることが増えた。そのため、事前授業の打合せがままならず、結局授業者「本人」または「部会長」が事前授業を行った部会もあった。また、突然、休校や午前中授業になってしまうこともあった。それにより単元構想の見直しを迫られたり、予定外のスライド資料を作ったのオンライン授業をしたりすることになった。

各部会が工夫し、苦勞し何とか乗り越えてきたのが実情である。そうした苦勞により、各部会の取組は形になっている。

### ○研究授業について

<p><b>山鹿部会</b> 4 説得力を高める 根拠を吟味して書こう「地図」の意見文(東書2年)</p> <p>部会長：大倉 一男(山鹿市立山鹿中) 授業者：佐々木勇太(山鹿市立山鹿中)</p> <p>事前授業：佐々木勇太(山鹿市立山鹿中)</p>
<p><b>玉名部会</b> 6 いにしへの心を訪ねる 音読を楽しもう「平家物語」(光村2年)</p> <p>部会長：松村妃里子(荒尾市立荒尾海陽中) 授業者：直井 春那(山鹿市立山鹿中)</p> <p>事前授業：松村妃里子(荒尾市立荒尾海陽中)</p>
<p><b>荒尾部会</b> 5 筋道を立てて 話題や展開を捉えて話し合おう グループ・ディスカッションをする(光村1年)</p> <p>部会長：山村 将文(長洲町立腹栄中) 授業者：後藤朝日香(長洲町立長洲中学校)</p> <p>事前授業：師井 大亮(荒尾市立荒尾海陽中学校)</p>

### ○子供の声を引き出す工夫について

子供の声	山鹿部会	玉名部会	荒尾部会
わくわく	議論で進める授業	教師自らの「わくわく」	充実感が得られるテーマ
なぜおそらく	具体的情報	絶対解のない発問	前時の振り返り
やってみようなるほど	立場・意見・根拠・理由づけでの交流する	立場の視覚化して交流を促す	役割のめあて 班の目標 意見・根拠(付箋)
わかったできた もっとやってみよう	振り返りの視点 今後の生活・生き方	まとめ方の提示 個の読みの保障	前時との比較 他教科・実生活

各部会の取組を左表のようにキーワードで示した。

例：山鹿部会

- 議論で授業を進めることで生徒の「わくわく」を引き出す。
- 都市の情報や地図といった具体的情報をICTで提示し、分館を作る場所は「なぜ」その場所がいいのか考えさせる。
- 意見を視覚化し、理由や根拠を話し合うことを仕組むことで「やってみよう」を引き出す。
- 生徒の振り返りに対し教師が「今後の生活や生き方に生かそう」と言葉かけをし「もっとやってみよう」を引き出す。

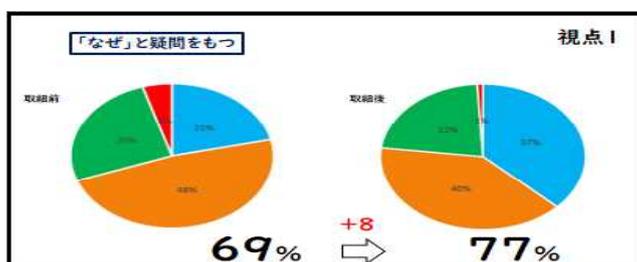
### ③再現可能な実践の蓄積

本大会では、再現可能な実践を残すことも目的の一部であった。ある特定の指導者や、ある特定の学級集団だからできる取組なのではなく、それ以外の人でも再現できるような実践例が残れば、日々の授業に生かせると考えたからだ。そのために、本大会の学習構想案は、授業当日のものではない。配信した授業を、授業研究会で練り上げ、修正したものである。

### ④「熊本の学び」の授業づくり研修

対面とオンラインを併用することで当初中止となった研修を実施した。田上貴昭先生（熊本県教育センター）を講師に招き、「熊本の学び」の授業づくりについて研修した。模擬授業や学習構想案づくりなど具体的な研修内容で、本大会へつながるものであった。学習構想案集をつくったときの疑問点などを解消する機会となった。

## 6 取組の成果



### (1) 視点1導入の成果

○「なぜ」と疑問をもつ 77%

「なぜ」と疑問をもつが、8%増えた。「あてはまる(水色)」も16%増えている。

取組を通して、導入で「なぜ」と疑問をもって授業に参加する生徒が増えた。



### (2) 視点2展開の成果

○「やってみよう」と挑戦する 81%

取組を通して「やってみよう」と挑戦するが9%増えた。



○話し合いで相手に質問をする 71%

受け身の姿勢については、取組を通して「質問する」生徒が8%増えた。「当てはまる(水色)」は11%増え、受け身の姿勢の改善につながったのではと考えている。



○話し合いで自分の考えが深まる 93%

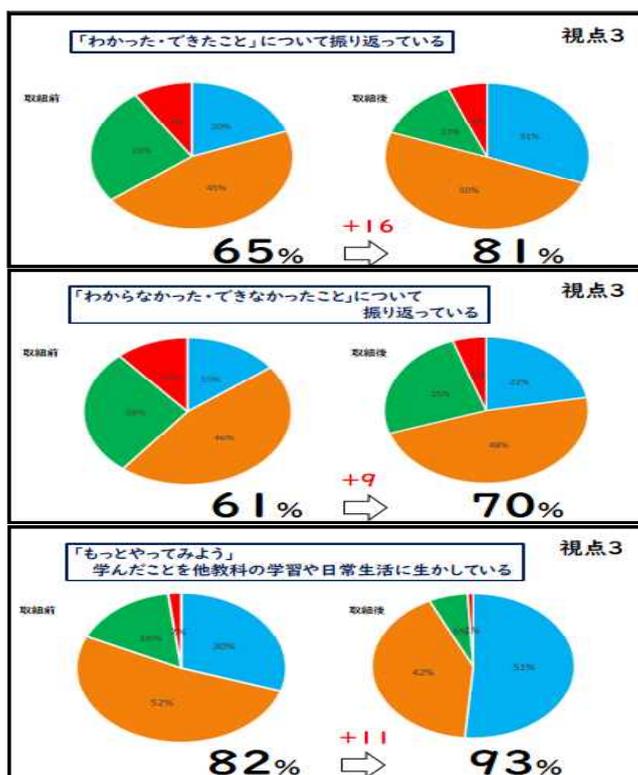
また、話し合いが「深まる」については、取組を通して4%増えた。「当てはまる(水色)」も16%も増えた。



○話し合いで自分の考えが広がる 87%

「深まる」よりやや低かった話し合いが「広がる」については、取組を通して5%増えた。「当てはまる(水色)」も10%増えた。

よって視点2の取組を通して、受け身の姿勢の改善が見られ、「やってみよう」と挑戦する生徒が増えたと考えている。



### (3) 視点3 終末の成果

- 「わかった・できた」を振り返る 81%
- 「わからなかった・できなかった」を振り返る 70%

比較的低かった振り返りについての数値が改善した。「わかった・できた」を振り返るについては、取組を通して16%増えた。「分からなかった・できなかった」を振り返るについては、取組を通して9%増えた。

- 国語で学んだことを他の教科や日常生活に生かしている 93%

これは、「学んだことを国語の授業に生かしている」よりも低かったが、教師が「他教科や・日常生活」へ方向づける声かけをするなど取組を通して11%増えた。「もっとやってみよう」という更なる意欲を他教科や実生活へつなげられたと考えている。

## 7 取組の課題

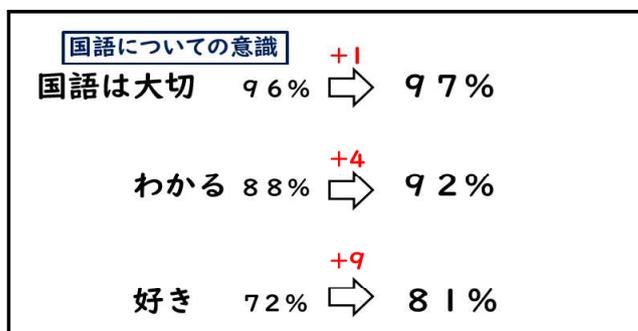


- 学んだことを国語の授業に生かしている 88%

取組を通して2%しか増えていない。この視点3に関わる項目が、課題として残った。

また、全体的に見ると、「どちらかといえば当てはまらない」の割合は、どの項目についても大きく変わっていない。つまり「どちらかといえば当てはまらない」という層の子供たちにどうアプローチしていくかも課題といえる。

## 4 おわりに



玉名・荒尾の国語教師の授業改善の一助となればと思う。今後も本大会の経験が「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める子供」を育てる力なればと考えている。

本大会のために尽力いただいた全ての方に感謝いたします。